

【退任記念講義】

昭和の教育者達

内 田 満

東京慈恵会医科大学形成外科学講座

MY RESPECTED TEACHERS IN THE SHOWA PERIOD

Mitsuru UCHIDA

Department of Plastic and Reconstructive Surgery, The Jikei University School of Medicine

I. はじめに

教育は誰の人生にとってもさまざまなターニング・ポイントとなりうるものである。私はこれまで自分の人生を教育という視点から振り返ったことはなかったが、私が医師になる前に私を教育してくれた3人の先生方についてお話ししたい。私は形成外科医として長年東京慈恵会医科大学（慈恵医大）でお世話になってきたが、もし私が大学のために、少しでもお役に立てたとするならば、それは間違いなくこの3人の先生方のお蔭である。学術的な内容ではなく、また明確な根拠のない記述もあるが、退任記念講義ということでご容赦願いたい。

私は昭和生まれであるが、いわゆる昭和人ではない。昭和人とは、昭和という時代を作った人達をさす言葉である。したがって昭和人のほとんどは大正生まれであり、今日私がお話する3人の教育者はいずれも大正生まれの人達である。

私が生まれたのは、1949年、その4年前に太平洋戦争は無条件降伏という形で終結した。現在のウクライナやイラクの情勢をみれば、米国、英国、ソビエト連邦、中華民国による日本の分割占領案が現実のものとなっても、全く不思議はなかった。もしそうなら、現在の日本の繁栄はなかったであろう。分割占領が回避された理由の一つは、中華民国、現在の台湾がこの案に強く反対したからといわれているが、その真偽のほどは不明である。

私が生まれて3年後、1952年の六本木の写真をみると、六本木通りには都電が走っており、遠くに国会議事堂が見える。私が育った家はそこからそう遠くはなかったが、家の隣は空き地になっていて、空襲で壊された建物の基礎部分のコンクリートが廃墟のように残っていて、そこで毎日のように遊んだことを覚えている。

同じ年の愛宕トンネルと愛宕山の風景は現在とあまり変わらない。当時あったNHKのラジオ放送局は進駐軍に接收されており、FEN (Far East Network) として進駐軍向けの英語放送を行っていた。翌年1953年には英国エリザベス女王の戴冠式がロンドンで行われた。一昨々年、2012年にエリザベス女王即位60周年のJubileeの式典がロンドンで行われたことを覚えていらっしゃる方も多いと思う。

II. 森 一 郎 先生

皆様にご紹介したい最初の教育者は、森一郎先生（1923～1991）である。受験の神様、あるいは受験生の教祖などとも呼ばれた方で、都立日比谷高校で英語の先生をされていた。私は中学2年から高校3年まで英語の家庭教師をしていただき、教育ママであった母の指示に従い、大変素直に5年間英語を習い続けた。私が初めてお会いしたころには、有名な、というよりかつて有名だった『試験に出る英語』シリーズは、まだ1冊も上梓されてはいなかった。第1冊目の『試験に出る

英語』の原稿を見せられ、その中の問題を解かされたことを覚えている。数は少ないが、森先生が私の家に教えに来てくださったこともあった。ちょうど東京オリンピックの時で日本の女子バレーが金メダルを取った時に先生が見えており、形成外科医だった父が興奮して「勝ちました」と私達が勉強している部屋に飛び込んできた。中学3年生だった私は、「勉強中なのに」と冷ややかに対応した記憶がある。このシリーズの中でも最大のヒットとなった『試験に出る英単語』は関東では『出る単』、関西では『しけ単』と呼ばれている。森先生は「大学の受験に出る英語は、インテリがディナーの席でする会話で使われるような単語である」とおっしゃっていた。ある出版社が出した大学受験生のための単語集で、必要な単語は最初の頁では、2つだけだった。abdomenなどという単語は、神聖な大学入試では決して出ることとはなく、知っている必要はないとおっしゃっていたが、おかげでこの単語はすぐに覚えてしまった。「ぜったい試験に出ない単語」という題のついた章の中に書かれていることである。先生が売れっ子のベストセラー・ライターになった後、多くの出版社が執筆の依頼に先生を訪れたが、先生が批判の対象としたこの単語集を出した出版社だけはついに来なかったと言って笑っておられたことを覚えている。

ごく初めの頃、先生に言われたことは、英作文の出だしで、Pという文字を間違っって書き始めたら、その英作文は零点だという指摘である(図1)。このエピソードは、二つのことを教えてくれたと思っている。一つは、物事はわかればいいというものではないということ、もう一つは、主観的な判断には議論の余地はないということである。

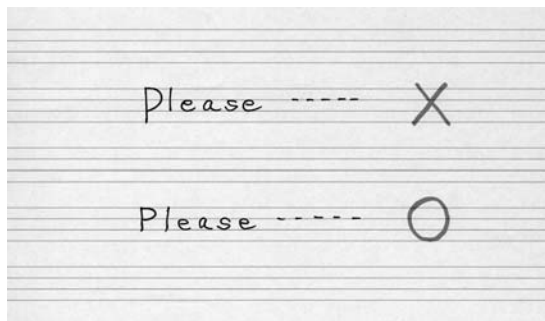


図1. 大文字Pの書き方

シリーズの中の『試験に出る英文解釈』には、たくさんの短い英文、60～70語くらいの英文とその日本語訳が掲載されていた。森先生は「時間がなければ英文は読まなくてもよい、その日本語訳を読むだけでも十分勉強になるから読みなさい」とおっしゃっていた。私は繰り返し、日本語の方だけを読んだ記憶がある。またあるとき、「東大で一番英語ができるのは何科の学生か知っているか。英文科ではない、それは哲学科の学生である」と言われた。つまり英語ができるかどうかは、国語の問題であり、人間が成熟しなければだめだと言ってくれたようである。

森先生は大変優しい先生だった。執筆のかたわら、俳句を作っていて、のちに俳人としても知られた方である。朝日新聞の選考に通ったと嬉しそうに新聞を見せてくれたが、その後で、「いつも実利的なことばかりやっているとは思われたくないからね」と少し恥ずかしそうにおっしゃっていた。写真(図2)はある新聞のインタビュー記事に出ていた写真である。こういう写真を載せるだ

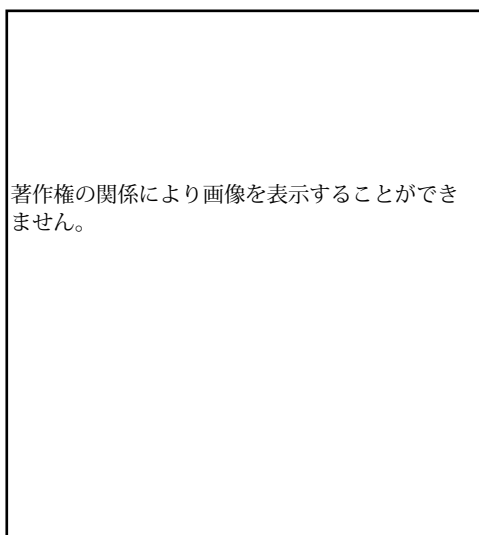


図2. 森一郎先生(朝日新聞 平成2年(1990)4月18日夕刊より転載)

けで、その人の性格がわかる。かわいい、いい写真である。日比谷高校の優秀な生徒たちが、卒業前に先生のところに挨拶にくると、「自分は家系的に間違いなく癌で死ぬから、頑張って勉強して、癌を治す方法を見つけてくれ」と言っていた。残念なことに先生は68歳の時、肺癌で亡くなられた。『試験に出る英語』シリーズは、結局3,000万部近く売れた。その理由はこれらの本は受験生の知識の量をただ増やすだけの本ではなく、受験生に学び方を教える本であったからだと思う。私が森先生から習ったことも学ぶ方法であり、おそらくそれが教育の最も重要な目的の一つなのだと思う。

森先生のお蔭もあり、1968年に私は一応の希望大学に入学することができた。この年、全共闘運動が全国に拡がり、授業がない日が続いた。当時は通学の電車の中でヘルメット姿の学生に度々遭遇した。しかし結局、全共闘運動は、日本の社会に良いものは何一つもたらさず、日本の社会が変わることもなかった。翌年1969年には、三島由紀夫が母校の東大安田講堂で全共闘の学生と対話を行った。私自身は全共闘運動には全く無関心であり、特に批判することも、称賛することもないが、彼らのグループ内における言論統制が、現在の北朝鮮や中国などと何ら変わることがなかったことだけは、お話ししておきたいと思う。

Ⅲ. 霜山徳爾先生

結局、最初に入学した大学には縁がなかったようである。私は3年間で退学し、1971年に上智大学文学部教育学科心理学に入学した。1960年代後半までは、四谷の上智大学とイグナチオ教会の前の新宿通りには、まだ都電が走っていた。

そこでお会いしたのが心理学科長であった、霜山徳爾先生(1919～2009)である。ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』の翻訳で有名な心理学者であり、心理学だけでなく、精神医学、精神病理学、哲学、さらに文学、クラシック音楽、などに造詣の深い、大変な博学の先生であった。『裸足の心理療法』『人間へのまなざし』その他数多くの著書がある。また学生に圧倒的な人気のある先生であった。

『夜と霧』は霜山先生がドイツのボン大学に留

学していたとき、アウシュビッツ強制収容所での体験を描いた『一心理学者の強制収容所体験』という本に出会い、大変に感動して著者のフランクルに会いにいき、日本語への翻訳が実現した。『夜と霧』はベスト・セラーとなり、大きな話題となった。最近新しい訳も出た。『夜と霧』に次いで、似たような強制収容所ものが、多数出版されたが、結局残ったのは「夜と霧」だけであった。その理由について、ある人は『『夜と霧』が人の心を打つのは、フランクルが『告発しない』ことによります』と述べている。素晴らしいコメントだと思う。

霜山先生から教わったことは、実験心理学、数理心理学、学習心理学などのevidence based psychologyではなく、もっと生身の人間を、wholenessとして扱う心理学であった。人間の感情がいかに複雑なものであるか、人間同士のコミュニケーションの難しさ、そして人間の弱さなどを教えられた。霜山心理学の基本的な立場は、不安を抱え、明日が信じられない人間ほど、かえって人間の幸せについて、強く深く思うことができるというものである。「健康なからだに健康な心が宿る」という格言があるが、実際には「健康なからだにもできれば健康な心が宿ってほしい」という方が正しいのかもしれない。いろいろなアスリートの不祥事がメディアで大きく取り上げられているが、それらは全く驚くにはあたらないことだと思う。

「心を安んじて徒労の杯を飲む」という言葉は、霜山先生が臨床心理学を実践するときの基本的なオリエンテーションとして話されたことであるが、これはそのまま私の臨床医としての行動規範の中核に位置するものとなった。霜山先生の教室からは、数多くの優秀な心理療法家が育っていった。霜山先生は優しいけれども、学問に関しては大変に厳しく、ゼミの学生が、医学部の学生と対等以上の知識と技能をもつことを要求した。心理療法家は決して格好のよい職業ではない。「心理療法を生涯の仕事にしようとすることは、並々ならぬ決意と、一生心の安らぐことのない労苦を覚悟するということである」と話されていた。私は心理療法家になろうかと思ったこともあったが、決心することはできなかった。そのexcuseというわけではないが、上智大学心理学の3年生になっ

たときには、すでにもう一度医学部へもどろうと決めていた。

医学部受験と霜山先生の厳しいゼミの両立はとても無理と思ひ、当時心理学科で精神医学を教えていた小木貞孝先生、加賀乙彦という名でその後多くの小説を書いていらっしやるが、小木先生のゼミをとり卒業論文を書いた。卒論のテーマは「フランツ・カフカの病跡学」であり、今思い出しても恥ずかしくなるような論文であったが、「内田君は医学部受験もあるようだし、これでよいことにしてあげよう」という優しいお気持ちで、卒業させてくださったと思っている。カフカはご存知のようにプラハ育ちのユダヤ人であり、私も訪れたが、プラハ郊外のカフカのお墓には、いつもローソクと花が置かれていた。

霜山先生は敬虔なCatholicであった。私が上智の4年生の時、1975年の3月頃ちょうど慈恵医大の入試の少しあとであった。霜山先生のお子様のひとりが突然に亡くなられ、四谷のイグナチオ教会で葬儀が行われた。私は弔問に伺ひ、型通りにお悔やみの言葉を述べて立ち去ろうとしたときに、先生は「慈恵の入試はどうした」とお聞きになった。「通りました」と答えると「それは良かった」とひとと言、おっしゃった。私はこのときのこと思い出すたびに、もし将来私が同じ状況で先生の立場に立たされたら、同じような言葉を教え子にかけられる人間でありたいと思わずにはいられない。

IV. 辻トシ子さん

私が強い影響を受けた3人目の教育者は女性である。辻トシ子さん(1918～)を教育者と言ってよいかどうかはわからないが、私が多くの点で人間と人生について学び、教育を受けたことは間違いのない事実である。彼女の場合、先生と呼ぶと政治家のようになってしまうので、あえて先生とは呼ばない。辻さんは大変不思議な女性で、私は40年近く存じ上げているが、いまだによく理解することができない。辻さんは、森先生、霜山先生よりも年上であり、2015年2月で97歳になられるが、今でも大変お元気である。

辻さんのお父様は、大変な慈恵医大のファンであったようで、ときどき入院されては、ドクターを大勢ひき連れて新橋に食事に出かけられた。そのため「今度辻さんはいつ入院するか」と聞く医

辻 語 録

- 一 物事は一拍の間を置くこと
- 一 今日やらなくてはならないと思う事は、明日に延ばすこと
(一拍の間)
- 一 物事はルーズに行うこと(正確を期するのは止めよう)
- 一 タイムリミットを持たないこと(ゆっくりリズムでいこう)
- 一 物事をオーバーに考えないこと
- 一 目に付いたものを全部やろうとしないこと(曲がったものは曲がったままで良い。真っ直ぐにしなくてよい)
- 一 物事は完璧すぎではいけない
- 一 何でも一遍にやってみようとしないうこと
(徐々に徐々に慌てないこと)
- 一 人に会うのもこれまでの半分にする
- 一 平気で嘘をつくこと
- 一 無理は禁物(無視することや知らん振りが大切)
- 一 自分を大事にして人生を大いに楽しむこと

図 3. 辻語録

者が何人もいたとのことである。またあるときお母様が慈恵に入院なさると辻さんは‘ぼっくり下駄’を履いて毎日慈恵医大の病室へ通った。ポケットの中には鈴が入っており、その足音で看護師さん達は、「ああ辻さんの娘さんがいらした」とわかったということである。約90年前のことである。

辻トシ子さん自身は衆議院議長や副総理などを歴任された益谷秀次さんという政治家の秘書をなさっていた。歴代総理では、池田勇人さん、佐藤栄作さん、大平正芳さん、宮澤喜一さん、羽田孜さん、村山富市さんと特に親しかったようで、小泉純一郎さんが総理になったとき、「はじめてあまり知らない人が総理大臣になったわ」とおっしゃっていた。

この辻語録(図3)は、私は大変興味深いと思うので、ご紹介したい。それほど特別なことが書かれているわけではない。いろいろ悩んでいたある企業経営者が辻さんに相談し、辻さんがアドバイスした内容を、その経営者の秘書の方が書き留めたものがもとなっている。辻さんの事務所は、アメリカ大使館の前のビルにあったが、大蔵省、通産省などのお役人が連日数多く参上していた。辻さんの言葉は、そんなエリート達に向けての言葉と思って読めば、納得していただけると思う。私の家内などは、「こんなことはもうとっくにしています。どこが重要なかわかりません。」と言っていたが、のんびり人生を送っている人にとっては、何の感慨もない言葉なのかもしれない。しかしこのような言葉を正面から受けとめる人はやはり必要であり、国家や組織の中のあるパーセ

ンテージ、10%か20%の人達はそうでなければならぬのだと思う。

私が慈恵医大に入学した1975年6月に、東京教育大学附属高校(現在の筑波大学附属)の卒業生で、慈恵関係者の同窓会が開かれ出席した。樋口一成先生をはじめ、多くのなつかしい先生方のお顔が見える(図4)。私は新入生であったので、樋口先生の隣の席に座らされた。そのときに辻トシ子さんの話が出て、樋口先生から「辻さんとは交流を絶やさないようにしなさい」と言われた。樋口先生はこの会の約2ヵ月後、8月26日に71歳で急逝された。

私は樋口先生に言われた通り、空いた時間を見つけては辻さんの事務所に遊びに行った。1988年と先月の写真を比べると(図5,6)辻さんは少し年を取られたが、私の方が、はるかにしっかり、年を取ったようである。辻さんには「医者は社会性がない」とか「医者にはマッチポンプだから」な



図5. 1988年辻トシ子さんとともに



図4. 東京教育大学附属高校同窓会、前列中央が樋口一成先生その左が著者



図6. 2014年12月辻トシ子さんとともに

どと言われたが、数多くの政治家やお役所のエリート達をみている人にとっては、そう感じても仕方がないことかもしれない。私が辻さんから学んだことは、いかに世の中のことを自分が知らないかということを知ることができたということである。存在していることを自分が知らないということさえ知らないという状況は、ある意味で救いが無い状況であり、インターネットで検索することもできない。誰かに直に教えてもらうか、何らかのきっかけを与えてもらうしかない。そしてそれは教育の方法論における重要な課題のひとつではないかと思う。

宮澤喜一さんは歴代の総理大臣の中では一番のインテリと言っても良い人である。2007年2月に辻トシ子さんの「米寿を越えた喜びの会」が開かれた。辻さんの89歳の誕生日を少し過ぎた頃で、大変に盛大な会であった。宮澤さんはすでに体調をこわされて入院されていたが、病院から車イスにのって、パジャマの上に背広をはおった姿で現れて、祝辞を述べられた。短いスピーチであったが、宮澤さんが最初に言ったことは「戦後のあの惨めな時代」という言葉だった。宮澤さんの脳裡には、終戦後の日本の姿が焼きついていたのだと思う。そして「その後の日本の発展の中で、辻トシ子さんは常に私達の女王陛下でした」と語った。エリザベス女王の戴冠式で、当時の皇太子殿下、現在の天皇陛下は、ネパールの王女の隣という大変な末席を与えられていた。当時は外国では日本は敗戦国であり、みなさん、それは肩身の狭い思いをされたようである。宮澤さんもそのような経験をされたお一人だったと思う。2007年のパーティーが終わって約4ヵ月後に、宮澤喜一さんは亡くなられた。

政治家についていろいろ述べてきたが、結局政治家は、私には常に謎であった。ある大変に子供の教育に熱心な父親がいた。彼は子供を将来何にしようかと迷い、聖書と銀貨とリングを与えて外出した。帰ってきて、もし聖書を読んでいたら牧師にしよう、神父にしよう、銀貨で遊んでいたら銀行家にしよう、リングを食べていたら農夫にしよう、百姓にしようと思って帰宅したところ、何と子供は聖書の上に腰かけ、銀貨をポケットに入れ、リングをかじっていた。それでその人は仕方

なく子供を政治家にした。これは福澤諭吉が書いていることである。もちろん全ての政治家がそうであるとは言わないが、やはり私にとって政治家は本当に不思議な存在である。

辻トシ子さんと慈恵との関係で忘れてならないことは、辻さんのお父様のお陰もあって、慈恵医大は衆議院医務室や日本航空など、いくつかの重要な派遣先を獲得できたかもしれないということである。1985年8月12日に日本航空123便が御巢鷹の尾根に墜落した。慈恵医大からは多くの医師が現地に派遣され、ご遺体のお世話にあたったが、私も1泊で参加した。夏の大変に暑い最中のことであり、体育館に隅々まで並べられたご遺体のことは、生涯忘れることができない。この事故では520人の方が亡くなられた。単一の飛行機事故では最悪の結果である。そして今から4年前の東日本大震災の犠牲者はその30倍、約16,000人である。しかし、太平洋戦争では、さらにその200倍、300万人の方が命をおとされた。地震はある意味では、仕方がないことかもしれない。しかし戦争はそうではない。私達は人類がこれほど愚かな行為を続けてきたこと、そしてこれからも続けていく可能性があることを認識しなければならないと思う。まさに「歴史の振り子は決して中庸であったためしはない」のである。現在の私達の飽食暖衣の生活は、私達と同じ年代の300万人の犠牲の上になり立っていることを、決して忘れるべきではないだろう。

V. 形成外科医という選択

私は祖父も父も形成外科医だったので、小さい頃から形成外科はとても身近な存在であった。形成外科のことを父からも母からもきかされて育った。慈恵医大を卒業して科を選ぶにあたっては、小児科を選ぶことも考えたが、丸毛英二先生という大変魅力的な先生が教授を務める形成外科を選んだことは、私にとっては当然の成り行きだった。その後の2人の主任教授、児島忠雄先生、栗原邦弘先生、そして大変個性的な大島襄先生、亡くなられたが、中村純次先生、皆さん私にとってかけがえのない恩師である。

1988年から1990年まで、私はアメリカニュー

ヨーク大学の形成外科へ留学させていただいた。マンハッタンの国連ビルの少し南にあるニューヨーク大学メディカルセンターに通った。形成外科の主任教授はJoe McCarthyで、小児のcraniofacial surgeryの権威であり、最も油ののり切った時期だった。写真(図7)は昨年McCarthy夫妻が来日されたときのものであり、McCarthy夫妻が大ファンであった、篠田桃紅さんという現代アートの巨匠のアトリエにお連れした。桃紅さんは今年で102歳であるが、まだお元気で作品を作っているらしい。桃紅さんや今年で97歳になる辻トシ子さんをみると、ひょっとすると女性は男性よりも優れたspecies, 種なのではないかという考えが頭をよぎるが、もちろんそんな考えは慌てて打ち消さねばならない。偶然ではあるが篠田さんも辻さんもともに岐阜の出身でいらっしやる。

ニューヨークに留学中にアメリカ大陸の何人かの有名な形成外科医および手外科医の教室を訪ねた。PhiladelphiaのPeter Randall, MiamiのRalph Millard, DallasのKen Salyer, Salt Lake CityのGraham Lister, Mexico CityのFernando Ortiz-Monasterioである。いろいろな所へ行って直にその人やその人の教室に接することにより、「何だかよく分からないけれど凄そうなもの、本物らしいもの」と「言っていることはもっともらしが、何となくあやしげなもの、うさんくさいもの」を直感的に識別できる力が、少しずつ養われてくるような気がする。国内国外を問わず、留学の大きな効用のひとつはこのことではないだろうか。



図7. 左から McCarthy 先生, 篠田桃紅さん, McCarthy 夫人, 一人置いて著者

VI. 東京慈恵会医科大学 形成外科学講座について

さて2008年、平成20年8月1日付けで私は形成外科学講座を担当することになった。その翌日、赤塚不二夫さんが亡くなった。ある新聞、かりにA新聞としておくが、とかく批判されることの多い新聞だったが、その死亡記事を見たときだけは、少し見直した。でも私が担当する記者ならば、「お別れなのだ」ではなく、「喜んで悲しまなくてよいのだ」というタイトルにする。この感覚がお分りになる方は、本当の『天才バカボン』ファンだと思う。赤塚不二夫さんの葬儀では、タモリが弔辞を読んだ。その中でタモリは、「10代の終わりから我々の青春は赤塚不二夫一色でした」と述べた。タモリは私より4歳年上であるが、確かに私の中学、高校時代は、赤塚不二夫を読まない日はなかったといってもよいかもしれない。ところで、子供に漫画を読むなどということは無理な相談である。なぜなら日本の漫画やアニメのレベルは断然世界一だからである。しかしそれは漫画以外のものは読まなくてよいということにはならない。ここで忘れてならないことは、患者さんやその家族にとって、ナンセンスギャグやパロディーは、病院での医療の対極にあるということである。あるパロディー作家が1ヵ月間入院した後、数ヵ月間まったく仕事ができなかった、その理由は、病院とは祈りの世界であり、パロディーとは全く相容れないものであるからと書いている。本当にその通りだと思う。それゆえ私は病院内でダジャレを連発する医療関係者はどうも苦手である。

私は形成外科の中で、小児の先天異常疾患の治療をライフワークとしてきた。それは本当にやりがいのある分野だと思っている。昨年の秋頃のある日の外来患者さんのリストをみると、大人の方はごくわずかで、この日は0歳、1歳が通常よりもやや少ないが、いつも大体こんな感じである(図8)。従って外来におもちゃは必需品である。

子供が泣いていたなら、両親とゆっくり話すこともできない。子供が手術した手をどのように使うかを見るのに、おもちゃを与えることは大変効果的である。

子供が遊んでいてくれれば、親は安心して医師

と話すことができ、私達はゆっくり時間をかけて今後の治療について、両親に説明することができる。上智大学の授業で「遊戯療法は常にオールマイティーである」と教わったが、これほど大げさな表現でなくても、子供の診察におけるおもちゃの価値は、無視できないと思う。

慈恵医大の形成外科（当科）は、1968年の開設当初から、手足と顔面の先天異常の患者さんが多く訪れた。この2～3年の一つの特徴は、巨大な色素性母斑の患者さんである。約3年前まで、このような患者さんは本当に数えるほどしか当科を訪れていない。しかし最近の2～3年で、東北から四国、九州まで、また今月には外国からも、このような患者さんが数多く集まるようになった。このような症例の治療は何年も、おそらく10年以上かかる。初めの治療はきわめて大事であるが、その正しさが証明されるには長い年月を要する。私達はこのような疾患の治療については、

経過観察期間が短いため、まだ学会発表も、論文発表も行っていない。形成外科のホームページにも特に掲載していない。それでも患者さんが集まる理由は、インターネットである。このような母斑の治療は、できるだけ早くスタートしなければならない。多くの病院は、「1歳を過ぎたら」とか、「2～3歳になったら治療を始めましょう」という説明をしているようだ。私は全身状態が許せば、生後1ヵ月過ぎには治療をスタートすべきと考えている。慈恵医大では早く治療してくれるということが、口コミというより、インターネット上で拡がり、全国から患者さんが見えている。

インターネット上での患者さん同士のやり取りについては、私は一切関与しないし、それを見ることもない。しかし今後このような状況はますます増えてくると考える。あるお母さんは、「こんな珍しい病気のことは、誰も教えてくれない。自分で調べるしかないと思えばネットでくまなく探

内田 満

予約	受付	氏名	カナ氏名	性	年齢
9:00		〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇	女	12歳
		〇〇 〇〇	〇〇〇 〇〇	女	24歳
		〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇〇	女	5歳7ヵ月17日
9:30		〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇〇	女	40歳
		〇〇 〇〇	〇〇〇 〇〇〇	男	5歳4ヵ月2日
		〇〇 〇〇〇	〇〇〇 〇〇〇〇	男	3歳2ヵ月14日
10:00		〇〇 〇〇	〇〇〇 〇〇	男	8歳
		〇 〇〇	〇〇〇 〇〇〇〇	男	7歳
		〇〇 〇	〇〇〇〇 〇〇〇	女	5歳7ヵ月11日
10:30		〇〇 〇〇	〇〇〇〇 〇〇〇	男	5歳11ヵ月25日
		〇 〇〇	〇〇 〇〇	女	4歳10ヵ月28日
		〇〇 〇〇	〇〇〇 〇〇〇〇	男	0歳7ヵ月29日
11:00		〇〇 〇〇〇	〇〇〇〇 〇〇〇	女	7歳
		〇〇 〇〇	〇〇〇 〇〇〇	男	6歳
		〇〇 〇〇〇	〇〇〇〇 〇〇〇	女	14歳
11:15		〇〇 〇〇	〇〇〇〇〇 〇〇〇	男	2歳6ヵ月22日
11:30		〇〇 〇〇	〇〇〇 〇〇	女	0歳9ヵ月26日

図 8. 2014 年秋のある日の外来患者さんのリスト

して、そしてこの病院へ来ました」と言われた。本当に有難いことである。しかし、もし一つの症例で不測の事態が生じたら、インターネット上での批判はあっという間に全国に拡がるかもしれない。アメリカでそのような事が、実際に起こったということを知った。でも大学病院で専門性の高い治療を行っている限りは、そのようなリスクは引き受けなければならないことだと思う。この場をお借りして、このような、生まれて間もない患者さんの麻酔を、数多く引き受けてくださっている麻酔科の先生方に対して、心から感謝申し上げたいと思う。

最後になってしまったが、慈恵医大の形成外科の現状について、お話したい。形成外科は、第1次世界大戦後に誕生した新しい科である。他の外科系の先生方が行うよりも、形成外科医が行った方が、効率が良い、あるいは安全性が高いという理由で、いろいろな手技が形成外科医に任せられるようになり、成立し発展してきた科である。したがって他の科の先生方との協力と連携は不可欠である。もともと形成外科は、顔面の外科として始まった。頭蓋・顎・顔面領域は、形成外科の主要な分野であり、当科では、宮脇剛司、二ノ宮邦稔の二人の准教授が中心となって診療を行い、後進の指導に当たっている。手外科は、特殊な領域であるが、形成外科学講座初代教授の丸毛英二先生の時から、当科では最も盛んな分野の一つであり、それは現在も変わらない。松浦慎太郎准教授が、全体を統率している。近い将来、形成外科、整形外科、リハビリテーション科の手外科を専門とする医師および作業療法士が協力して、手外科センターができることを私は心から望んでいる。頭頸部再建は、頭蓋底や、咽頭・喉頭、上顎・下顎、舌などの悪性腫瘍摘出後の再建であるが、石田勝大講師、都立駒込病院の寺尾保信准教授がリーダーとなって、精力的に活動している。乳房再建は、野嶋公博准教授、森克哉講師そして都立駒込病院の寺尾准教授が中心となり、多くの症例をこなしている。その他、数多くの術後再建あるいは創傷の治療、さらには肝移植や腎移植のお手伝いもさせていただいている。この7年間、私を支えてくれた教室の先生方、そして、大学と病院の教職員の方々に、ここで改めて心からお礼を述べたい。

VII. お わ り に

アメリカでは教授が定年で辞める時、“He begins his retirement.”と言う。私もretirementを始められればとは思いますが、私はいろいろな事情で、慈恵医大の大学院を卒業したのは、昭和60年(1985)、従って本当の意味で社会に出て働き始めてから、ようやく30年にしかならない。田中角栄元首相は、高等小学校を卒業して、15歳から社会に出て働き始めた。30年働いても、まだ45歳である。パナソニックを創った松下幸之助は、小学校を4年で中退して、9歳から働き始めたので、30年働いても39歳である。そう考えると私は、まだもし大学や他の人達のお役に立つことがあるなら、もう少し働くべきではないかと思っている。William Jamesはアメリカを代表する心理学者であり、私も上智大学時代、彼が書いた心理学の教科書で勉強した。彼は生涯を捧げた母校のHarvard大学を去るとき、Alone with God and Truthと言った。素晴らしい言葉であるが、私にはとてもそんなことは言えない。とくにAloneについては、私自身はもともと友人が大変少ない人間であるので、定年になった後、ますます社会から孤立してしまうことがないようにという自戒を込めて、Aloneという言葉は、外したいと思う。With Godというのは、大変有難いことであるが、私にはそんなことを言う資格はないので、東洋人らしくwith Godsと複数形にしたい。With Truth, 真理とともに、というたさすがに恐縮してしまうので、私の場合はwith Humorくらいが適当ではないかと思っている。今後、慈恵医大の形成外科は、若くて元気な教授を迎えて、ますます発展していくことと思う。またそうでなければ、私のこれまでの苦勞、もちろんたいした苦勞ではないが、とても報われない。私自身は、大学と社会に対して、少しでも恩返しをするために、これからも精一杯元気で働ければと思っている。最後に、このような機会を与えて下さった松藤千弥学長並びに司会の労をおとりいただいた宇都宮一典教学委員長に心から御礼申し上げたい。

著者の利益相反 (conflict of interest : COI) 開示 :
本論文の研究内容に関連して特に申告なし